第18号　平成11年5月

# 団塊（ワシら）のカタログ

トシタロー・グラフィティ

もはや戦後ではない。**昭和30年**である。

## テレビ時代の夜明け

我が国の**テレビ放送**の始まりは**昭和26年10月**の**NHK**（日本放送協会）であるが、**28年8月**には**日本テレビ**（4チャンネル）が開局し、この年の4月からは**KR**（6チャンネル。今の**TBS**）も放送を開始した。

もともとラジオ局だった**JOKR**（**26年12月**）、**ラジオ東京**といっていた関係から当初は**ラジオ東京テレビ**などという、シャレにもならない局名だった。

これではいくらなんでもオカシイというので、5年後の**35年**に今の**TBS**（**東京放送**。TokyoBroadcastService）に局名変更され今に至っている。

その**ラジオ東京テレビ**の連続テレビドラマ第1号が「**日間名氏（ひまなし）飛び出す**」である。

忙しくって<u>ヒマなし</u>のオヤジ・ギャグなのだが、当時としては結構イキな都会派サスペンスとして好評だった。そして、元祖NHKに登場したのが「**私の秘密**」である。

「**事実は小説より奇なり**と申しまして、世の中には変った体験をなさった方がいらっしゃるものでございます。今週は、ここ千葉県松戸市民会館からお送りいたします。

さて、本日のご回答者でございます。**渡辺紳一郎**（しんいちろう）さん、**藤浦洸**（こう）さん、紅一点の**藤原あき**さん。そして本日のゲスト回答者はおなじみ作曲家の**吉田正さん**でございます」

大体こんな出だしで始まる。

司会は**高橋圭三**さん、ワザとらしい笑顔がいかにもNHKっぽい。

「やぁやぁやぁ、どうもどうも。さて本日のトップバッターでございます」「この方の秘密はこちらでございます」とテロップ（字幕）が流れ、盛大な拍手が会場を包む。

— 貴方ご自身の秘密ですか？

— 過去に何か良いことをなさった？

— それが新聞で報道されたとか？

— お名前に関係がありますか？

こんな質疑応答が続き、核心に迫るたびに客席から拍手が沸く。

このあたり、今でもクイズ番組の定番であるが、どんな秘密かというと、モリソバを30枚いっぺんに肩にかついで自転車で出前できるとか、ネコを100匹飼っているとか、名前が**東京一**（あずまきょういち）**日本一**（ひのもとはじめ）だとかで、別に秘密とイバれる程のことでもない。

そんなセコネタを解答者があてるだけなのだが、寅さんよろしく国内をまんべんなくまわるところがミソで、特に地方でウケた。

クイズ番組の北京原人といったところでやがて世界各地のガラクタの値段や使い道を当てさせる**世界まるごとHOWマッチ**や**なるほど！THEワールド**に受け継がれ、さらにグルメだ、下町だ、温泉だなどとケチな設定をして現在に至っている。

「さて、ここで問題です！」式のクイズ番組も原点は**私の秘密**なのだ。（戦後すぐにはラジオで**二十の扉**なんてのもあった）

毎週月曜日の7時30分から8時までのたった30分間だったが、当時は**バラエティー番組**

の絶対数が少なかったこともあって、ＮＨＫの人気番組の一つであった。

この４年後、**フジテレビ**（８チャンネル）と**日本教育テレビ**（10チャンネル。今の**テレビ朝日**）、さらに**ＮＨＫ教育テレビ**（３チャンネル）が加わり、１・３・４・６・８・10の６チャンネル体制が整うことになる。

その内の一つ**日本教育テレビ**の目玉が「**番頭はんと丁稚どん**」で、これを堂々と**私の秘密**の裏番組にぶつけてきた。

東京でも人気の出始めてきた**上方喜劇**の登場とあって、今の**吉本喜劇**以上の全国的な大人気を誇っており、ご学友どもはほとんど10チャンネル派だったが、ワシは意地でも１チャンネルにしていた。明治18年生まれのワシのオバァちゃん（この頃70才）のお気に入りが「**私の秘密**」だったからだ。

「**連想ゲーム**」も似たようなものだが、面白くてタメになるところがいかにもＮＨＫらしくて好感が持てる。ここで問題です！形式のクイズはどうも好かない。

## ソクの教祖慎太郎

この年、今の東京都知事**石原慎太郎**さんが「**太陽の季節**」で文壇デビュー、翌年**芥川賞**受賞、さらに**日活**で映画化され、弟の**石原裕次郎**もスクリーン・デビューをはたした。

**上流社会**でチョイグレの若い男女が主人公で、この当時としては庶民のあこがれだったマイ・カーを乗り回し、ガンとばされればすぐケンカする、女と見ればすぐナンパする、今ならそこら中にゴロゴロいて面白くも珍しくもなんともないが、ちょうど「**青い山脈**」がそうであったように当時は新鮮な題材だったのだ。

戦後10年、世の中が変わろうとしていたところに、今までになかった新しい小説が登場した。「世の中が変ろうとしていた。ボクらはかわっていた。だからウケたのさ」とビートルズ語録にあるように、古今東西、変動期にはよくあることなのだ。

**庶民**に純文学はなじみが薄いが、この作品が若者に与えた影響は小さくない。まずは本人と弟**裕次郎**のヘア・スタイル、かの**慎太郎刈り**である。

スポーツ刈りをちょっと長くしただけの、体育会系のショート・ヘアで、別にどうということはないのだが、かなり長い間床屋さんの定番であった。

**裕次郎**も、石原サル軍団のボスとしてのリーダーシップは認めるが、俳優としては**三船敏郎**以上の大根役者で、デビュー作「**太陽の季節**」にしても、主演は**北原三枝**（後の奥さん）と**長門裕之**だったし、どちらかといえばワキ役に近かったのだ。

この作品に出てくる主人公のマネをする若者たちは**太陽族**と呼ばれ、世をスネた若者のファッションになったのも今は昔である。

この当時、**グラサン**と**アロハシャツ**そして**慎太郎刈り**でキメるのが**太陽族**の定番３点セットであった。

まぁそうやってイキがっているだけならどうってことはないのだが、一部のアホウどもによる暴行・強盗などの青少年犯罪が多発、とうとう社会問題にまでなってしまう。

その流れはワシらが中学生の頃には**カミナリ族**（35年頃）へ、高校生になると**みゆき族**（39年頃）へと姿を変え、さらに**竹下族**から**暴走族**に至っている。

当時の世間は必ずしも好意的ではなく、小説の評価はともかくとして、**太陽族**を主題にした映画は「青少年の健全育成によろしくない」というので、文部省まで巻き込んだ大論争にまで発展してしまった。

環境庁長官・運輸大臣を経て、都知事にま

でなり、目をパチパチさせながら「NOと言える」大政治家も、この頃は「NO」と言われていたのかと思うと、急に親しみがわく。

と同時に「最近の若い奴はしょうがない。他人の迷惑を考えやしねえ」なんてエラそうに言っているオッさんも、かつては**グラサン・アロハシャツ・慎太郎刈り**でイキがっていたかと思うと笑えてくる。

チョイ・グレの若者の生態を描いた小説としては、村上龍の「限りなく透明に近いブルー」（昭和51年度の芥川賞受賞）や田中康夫の「なんとなく、クリスタル」（55年度文芸賞受賞）などがあるがいずれも世間に影響を与えるまでには至っていない。

単に、そんな連中のその程度の風俗を紹介しているだけである。

芥川賞は前・後期に分けて選出されるが、石原さんは後期で、前期は狐狸庵先生・遠藤周作が受賞している。

また、山岳小説の新田次郎（にった）と経済問題に詳しい邱永漢（きゅうえいかん）が直木賞（大衆文学専門）を受賞していて、粒ぞろいの年であった。

## 手塚治虫　再び

時には名前を変えて登場することもあるが手塚治虫の漫画には、同じキャラクターが登場することが多い。

アトムの出演者に例を取れば、同級生の**ケンー**くんは「**ジャングル大帝**」でレオの良き理解者として重要な役割を演じているし、**御茶ノ水博士**は「**火の鳥**」で**猿田彦**をベースに繰り返し登場してくる。

おなじみの脇役には**ヒゲおやじ**がいるが、**アセチレン・ランプやハム・エッグ**と並んで悪玉の代表に**ロック**がいる。

ニヒルでハンサム、だけどワル、そんな**ロック**が珍しく正義の味方に挑戦、見事に名演技を披露したのが「**ロック冒険記**」である。

舞台は火星、そこには羽が手の鳥人が住んでいて悪い地球人に苦しめられている。

そこに、地球人**だけど**心優しい**ロック**という少年が現れる。

はじめこそ劣勢だった火星人たちであったが、**ロック**の大活躍などもあってやがて勢力は逆転、再び火星に平和は訪れるのだが、終盤近く火星人との間とのちょっとした誤解から**ロック**は死んでしまう。

梅にウグイス、お山にボーズじゃないが、**手塚漫画**にはやはりＳＦモノが良く似合う。しかも、わざとらしくない程度に文明批判をしているところが良い。

**ジャングル大帝**は動物たち、**火の鳥**は火の鳥そのもの、**鉄腕アトム**はロボット、**リボンの騎士**は見習天使のそれぞれの目を通して見た人間の愚かさ身勝手さを描いていて、ストーリーの面白さに**付加価値**（プラス・アルファ）さえ与えてしまうのが手塚漫画なのだ。

**ロック冒険記**は３巻からなる長編だが、少年誌の連載ではなく、単行本として出版された。厚いボール紙の表紙で、中の紙も画用紙くらいの厚さがあって、それはもう立派な装丁の本である。その分値段も高くて、とても子供のおこづかいで手の届く代物（しろもの）ではない。

小学校５～６年の頃、**貸し本屋**で借りて来て読んだのだが、かなりスリ切れていてえらく汚かったのを覚えている。まぁ古いだけだったのかも知れないが、それだけ多くの子供（今の五十代）に読まれたのだろう。

文学界でも大物がドッと脚光を浴（あ）びたように、漫画界でも**石森章太郎**（石ノ森章太郎。サイボーグ００９）**横山光輝**（鉄人２８号）**さいとう・たかを**（ゴルゴ１３）がこの年にデビューした。これらの超大物漫画家に影響を与えたのが**手塚治虫**なのだから、彼の偉大さがわかろうというものである。

# こんなCMがあった

今でこそ化粧品から食品・コンピューターまで扱っている**カネボウ**であるが、この頃はただの繊維会社だったのだ。

東京は23区であるが、20区プラス３例外区（**足立・葛飾・江戸川**）という人もいる。

そんな中で、**江東区**と一緒にかろうじて20区に編入されたのが**墨田区**である。

**向島・両国・本所・駒形**など、歴史と由緒のある地名も多いのだが、スミがつくからかイメージ的になんとなく暗い。

その墨田区の北端に位置する**鐘ヶ淵**にある紡績（糸をつむぐこと）会社だから**カネボウ**という会社名が付いたのだ。

創業明治20年（1987年）というから、その頃の鐘ヶ淵はかなり寂しいところだったであろうことは容易に想像できる。

明治35年に本社は大阪に移転してしまったが、発祥の地ということで、墨堤通りには今でも物流倉庫が残っている。

目の前の綾瀬橋を渡れば、そこは荒川区の千住曙町、2~300メートル先を右に曲がると、堀切橋がある。

荒川土手を下に見ながら、すぐ左側を走っているのが京成のダサい赤い電車で、渡り切れば、そこは東京**例外**３区の一つ**葛飾区**、右には堀切菖蒲園、左手前には入りたくない小菅の東京拘置所が見える。

その**カネボウ**のCMソングが、ラジオにテレビにと大ヒットした。

♬カーンカンカン　カネボウ
　カーンカンカン　カネボウ
あかチャンの時から　カネボウ毛糸

レコード会社とタイ・アップして多くのヒット曲を世に送り出している**カネボウ**のCMソング第１号である。

今ではすっかり聞かれなくなってしまったが、それもその筈、昭和36年の化粧品を皮切りに、39年には食品、41年には薬品と順調に取扱い商品を増やしてゆき、住宅・コンピューター関連まで守備範囲を広げているのだから、何を今さら「赤ちゃんの時からカネボウ毛糸」というわけなのだろう。

**ナショナル**でおなじみの**松下電器**もヒット曲を出した。

♬明るいナショナル　明るいナショナル
　ラジオ・テレビ　何でもナショナル

かつては**松下電器**がスポンサーになっているテレビ・ラジオ番組のオープニングに欠かせなかったものだが、最も効果的に使われたのが朝６時45分から７時まで**ラジオ東京**（現ＴＢＳ）で放送された「**歌のない歌謡曲**」であった。包丁のトントントン、ご飯と味噌汁のにおい、そして♬**明るい　ナショナル**がラジオから流れてくると「朝だ朝だよ朝日が昇る」と思ったものだが、今テレビからこのメロディーが流れることはない。

**ゴホン**といえば**龍角散**。おなじみの傑作コピーであるが、この年からだから40年以上も続いていることになる。

龍の角を粉末（散）にした薬とは、これは又いささか大ゲサな命名だが、宣伝の方はそれに比べればジミである。

サポニン成分といわれても何がなんだかちっともわからないが、それでも同じ文句を繰り返されると、実際に効きそうだなと思い込んでしまうし、確かにスーッとはする。

**養命酒**同様、大ゲサな商品名と長寿は双璧だが、ジミで漢方・薬学的な宣伝に成功した好例であろう。